

文永の役に嵐は吹いたのか*

水越允治**

1. はじめに

13世紀後半に蒙古・高麗の連合軍が、文永11年（1274）および弘安4年（1281）の2度に亘って北九州に襲来したことは、よく知られた史実である。それぞれ、文永の役・弘安の役と呼ばれ、わが国の存亡にかかる大國難であった。第2次大戦中に日本歴史を学んだ者は、再度に亘って暴風が吹き、蒙古軍船が覆没してこの國難を免れた、すなわち神風が吹いた、と教えられてきた。弘安の役では確かに台風による暴風で、蒙古勢が壊滅して決着したと考えられ、それを裏付ける史料も多く残されている。しかし、文永の役の際には、暴風が吹いたのかどうか、あいまいなままになっていた。一説には蒙古軍が自発的に引き揚げたとし、また別の説には台風に匹敵するような大陸旋風（発達した温帯低気圧）による大風雨で多数の船に被害が及んだ結果である、としてきた。いずれにしても決定的な史料に乏しく、明確にはわかっていない。

2. 従来の考察

文永の役当時の記録としては、廣橋兼仲（1244-1308）の書き残した『勘仲記』がしばしば引用される。この記録の中に「俄逆風吹来、吹帰本国」とある部分から、逆風を暴風と解釈し、神風に結びつけたというのが通説であった。しかし、これとて伝聞による記述に過ぎず、確たる証拠とは言えない。

史学者の説を第2次大戦後に限ってまとめると、10月20日（旧暦）の夜、台風ではないが大嵐があって、多数の船が沈んだ結果を幕引きとする説（黒田 1965）、

風雨はあったにせよ天気とは関係なく、始めから威力偵察の予定で侵攻し、内部事情も重なって早々と引き揚げたとする説（五味 1988；筧 2001）に大別でき、かつての様な台風説は影を潜めている。

いっぽう、気象学の分野からは、夙に荒川（1958）が「文永の役を終りを告げたのは台風ではない」とし、

- (1) 季節的に台風の襲来はまず考えられない事
- (2) 信頼できる文書には大風雨の記載は無い事
- (3) 弘安の役の場合との話の混同が有ったのではないかという事

の3点を挙げて、神風説を否定している。また荒川（1988）は、台風説を改めて否定し、少しの風雨はあったにしても、撤収は自発的に行われたものであるとしている。

いずれにせよ、当時の北九州一帯の天気を記した確実な記録は存在しない以上、間接的な史料から推定する以外に方法は無いが、改めて京都の天気記録を仔細に検討したところ、荒川の推論をより具体的に裏付ける結果が得られたので、次に記してみたい。

3. 20日の夜に強い風は吹いたか

当時の現地の天候を推定する手がかりには、やはり『勘仲記』（文永11年の場合は『兼仲卿曆記』）が挙げられよう。この記録には文永11年の毎日の京都における天気が記されており、高橋（1997）によって資料紹介がなされている。問題の10月20日（旧暦）前後の天気推移を第1表に示す。

この表によれば、2日前の10月18日に、京都では晴れて風が強かったことが記されている。この時期に天気がよくてかつ風が強いということは、現在の知識から推せば、冬の季節風の吹出し以外には考えられない。すなわち、木枯しがこの日に吹いたことを示して

* Did a heavy storm blow at the invasion of Mongolian Corps to Japan, in November 1274?

** Mitsuharu MIZUKOSHI.

© 2009 日本気象学会

第1表 文永11年10月20日前後の京都の天気。

現行暦	1274年 11月23日	24日	25日	26日	27日	28日
旧暦	文永11年 10月17日	18日	19日	20日	21日	22日
天気	晴	晴, 風烈	晴	晴, 朝霜太	晴	自夜雨降, 巳 剋以後雨脚漸 休, 天顔猶陰

資料:「兼仲卿曆記」(記主 廣橋兼仲)による。

いる。近年の気象観測記録によれば、西日本における冬の季節風の最初の吹出し(木枯し1号)は、平年で11月中旬であり、現行暦で11月下旬にあたる10月18日に吹いても不自然ではない。この時の季節風は一兩日で止んで、19日には冬型気圧配置がやや緩み、風の弱まったその夜は放射冷却が強まり、その結果20日の朝に著しい降霜のあったことが記録からわかる。このような天気経過は、京都と北九州とでは、多少時間的ずれはあっても、ほぼ同様であると見てよいだろう。西高東低の冬型気圧配置のもとで、台風の襲来があるとはまず考えられず、台風説は否定してよい。

次に、発達した温帯低気圧による風雨が20日の夜北九州であったかどうか、ということであるが、京都で翌々日の22日(あるいは翌日21日の夜遅く以後)に降った雨は、温帯低気圧によるものであったと思われる。なぜならば、数日前に冬の季節風が吹き、続いて降霜があるような寒さの後の雨であること、また夜から昼前まで降り続いた雨であることから考えて、熱帯低気圧による雨とか、または前線通過による一過性の雨ではないと推定できるからである。とすると、この低気圧は西方から東進してきたと考えられるから、20日の夜に九州付近にあった可能性が高い。

しかし、もし蒙古の軍船を博多湾近くの海で沈めるほどの強風をもたらすような、発達した低気圧であるなら、21日の京都の天気にも多少その兆候があってもよさそうで、例えば、現在の「曇天」を意味する「陰」といった記録があつてしかるべきかと考える。ただ、古記録では、曇っていても空が明るく、降雨も殆ど気付かれない程度であれば、「晴」と記す傾向があるようで、21日の記録には、あまり独断的解釈をすることは避けたい。ただし、低気圧の進行速度を20~30 km/hとすれば、九州と京都の間の直線距離約500 kmとして半日か1日程度の差は出てくるから、

低気圧風雨説を完全に否定する事はできない。それにしても、この場合、京都の天気記録から推して、大風雨をもたらす程に発達した低気圧ではなかった模様である。繰り返すことになるが、21日に京都の天気がそれほど悪い状態ではなく、天気の悪かった22日の記録にも、風については何も記されていない点で、以上のことがうかがわれる。

4. 蒙古軍撤退について考えられるシナリオ

以上のことを基にして、次のような経緯を推定してみた。

(1) 蒙古軍が岩岐を侵攻して、博多湾に押し寄せた19日以前に、すでに強い北西季節風が吹出し、南に船を進めるには好都合であったが、本国に戻るには条件が悪い季節に入ったことを、彼らは承知していた。

2世紀近く後の室町時代後期に記された『八幡愚童訓』(記主不詳)に、蒙古襲来に関する記述があり、20日の我が方のぶざまな行動を風刺した落首が引かれている。その中に

「直垂ニ縫モミ千葉モ落ニケリ
ハケシキ怨ヤ木枯ノ風」

の1首がある。すでに木枯しが博多湾一帯でも吹いていたことを暗示させる。

なお、『八幡愚童訓』については、蒙古襲来事件のかなり後の成立であり、記載内容に疑わしい部分が多い、と言われていたが、この落首の具体的な表現は、事件当時でなければ分からないことを指しており、ことに風について「木枯し」としているからには、何等かの伝承によって記されたと考えてよいであろう。

- (2) 彼らには、日本に長く留まって戦闘を続けても、冬を控え、多数の軍兵を支える武器や食糧の確保に不安があった。
- (3) 彼らにとって、撤収の時期を考えると、季節風が卓越する冬に入れば、その機会が少なくなると判断した。
- (4) 20日に低気圧が西から近付いてきて季節風が収まり、低気圧前面の東寄りの風が吹出したことを潮に、彼らは急遽撤退を考えた。

前出の『八幡愚童訓』に「サル程ニ夜モ明レハ、廿一日ノ朝海ノ面ヲ見遣ルニ、蒙古ノ船無一艘皆々帰ケリ」とある。

- (5) 撤退の途中21日頃、沖合いの玄界灘で、低気圧に

よる風波のため、構造の劣悪な軍船が若干遭難した。このために、ある程度の溺死者を出した(蒙古・高麗側の記録に未帰還者一万数千とあるのも、数についての信憑性はともかく、この辺の事情があると推察する)。

5. おわりに

前項の筋書きには大きな矛盾はないと考えるが、もし、温帯低気圧の風雨を神風とするならば、あながち神風説も根拠なしとはしない。しかし、蒙古軍が撤退の途中の玄界灘で遭難したか否かを、日本の側で確認できたかどうかは疑問である。

『兼仲卿曆記』に「逆風」という語が記されているが、その解釈にも疑問が残る。続く「吹帰本国」という記述によれば、日本から大陸に向かって、季節風とは逆方向に吹く南東の風を指すのだろうか。

なお、参考までに記すならば、関口(1985)によると、西九州沿岸地方で北風を「上風(カミカゼ)」、南風を「下風(シモカゼ)」とよぶ所があり、もし古く

中世から用いられていたとするならば、「カミカゼ(北風)」→「神風」という言い換えも、あるいはあったのではなかろうか。問題の10月20日以前に吹いた季節風が神風とは、少し言い難い感はあるが……。

参考文献

- 荒川秀俊, 1958: 文永の役の終りを告げたのは台風ではない。日本歴史, (120), 41-45.
荒川秀俊, 1988: お天気日本史。河出文庫, 河出書房新社, 242 pp.
五味文彦, 1988: 鎌倉と京。日本の歴史5, 小学館, 398 pp.
筧 雅博, 2001: 蒙古襲来と徳政令。日本の歴史10, 講談社, 398 pp.
黒田俊雄, 1965: 蒙古襲来。日本の歴史8, 中央公論社, 518 pp.
関口 武, 1985: 風の事典。原書房, 961 pp.
高橋秀樹, 1997: 広橋家旧蔵「兼仲卿曆記文永十一年」について。国立歴史民俗博物館研究報告, (70), ‘資料紹介’, 41-71.